

間接的要求における「慣習性の認識」と「要求解釈傾向」との関連

平川真

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

目的

間接的要求とは、たとえば「窓を閉めて」という要求行為を、「この部屋寒いね」といった要求内容を明示しない発話によって行うものである。

特定の会話場面でなされた要求内容を明示していない発話（以下、発話）を要求として解釈するかどうかは、もちろん個人によって異なると想定されるが、一方で、多くの人々が要求として解釈する発話から、ほとんどの人々が要求として解釈しない発話まで、要求の意味の慣習性が異なる発話が存在する（平川, 2022）。ここで要求の意味の慣習性は、ある発話について要求として解釈することが適切であると判断する人の多さを指す。

平川（2022）では、実際の慣習性とそれについての認識（集団平均値）との対応関係を検討している。刺激として使用された発話の実際の慣習性は.12から.94と幅広く、実際の慣習性とその認識の集団平均値との相関は $r = .98$ であり、集団レベルで実際の慣習性と慣習性の認識が強く関連していることが示されている。

本研究では、個人レベルでの検討として、慣習性についての個人的認識とその個人が発話を要求として解釈しやすい傾向（以下、要求解釈傾向）との関連を検討する。なお、検討に使用するデータは、平川（2022）のデータと同じものである。

方法

研究協力者 クラウドソーシングサービスを利用し、613名からの回答を得た（平均年齢39歳）。

手続き (a) 慣習性の認識の測定: 24種類の短い会話場面（間接的要求20場面、直接的要求4場面）をランダムに呈示し、各場面について要求としての解釈を呈示した上で、「そのように解釈する人は世間一般にどれくらいいると思いますか」と尋ねた。協力者はスライドバーを用いて、呈示された発話を要求として解釈する人のパーセンテージを回答した。(b) 要求解釈傾向の測定: (a)で使用した場面とは異なる24種類の会話場面をランダムに呈示し、各場面について要求としての解釈を呈示した。協力者は、その解釈が適切と思うかどうかを2件法で回答した。

結果と考察

要求解釈の適切性判断を行う課題で協力者が適切であると判断した場面の数を、その個人の「要求解釈傾向」の指標とした。

使用した場面ごとに、慣習性についての個人的認識と要求解釈傾向との相関係数を求め、Table 1に示した。Table 1には補足的な情報として、実際の慣習性、すなわち、その発話を要求として解釈することが適切であると判断した比率（%）を示している。なお、実際の慣習性を求めたデータは本研究とは異なるデータである。

20場面のうち19場面で、慣習性についての個人的な認識は、個人の要求解釈傾向と中程度に正相関することが示され（20場面での相関係数の平均は.30）、要求の意味を解釈しやすい個人は、そうでない個人と比べて、その発話を要求として解釈する他者の割合を多く見積もりやすいことが明らかとなった。

唯一、両者の関連が認められなかった場面は、実際の慣習性が91%と高い場面であった。なお、直接的要求がなされる場面では、慣習性の認識と解釈傾向の関連は認められていない（ $|r|s < .06$ ）。

Table 1

会話場面ごとの「慣習性の認識」と「要求解釈傾向」との関連

場面No	実際の慣習性	解釈傾向との相関	場面No	実際の慣習性	解釈傾向との相関
ind8	12%	.29	ind26	56%	.31
ind14	16%	.25	ind16	61%	.30
ind36	21%	.30	ind7	67%	.34
ind15	26%	.27	ind25	69%	.37
ind38	35%	.29	ind34	74%	.34
ind28	38%	.34	ind18	80%	.33
ind27	41%	.33	ind20	81%	.33
ind33	49%	.33	ind31	84%	.25
ind1	51%	.32	ind40	87%	.30
ind2	54%	.32	ind10	91%	.11

引用文献

平川 真 (2022). 間接的要求の慣習性とその認識について 日本社会心理学会第63回大会発表論文集, 183.

※本研究はJSPS科研費(20K14131)の助成を受けた